同窓会報
第142号
2025年6月1日発行
千葉大学教育学部
同窓会
〒263-8522
千葉市稲毛区弥生町1-33

就学前の子どもたちに必要なもの

千葉大学教育学部同窓会 理事
幼稚園園長　森島弘道
（H2・3卒　千葉市）

私は現在、学校法人の幼稚園及び社会福祉法人の保育園・子育て支援拠点事業の運営を通して乳幼児期の子どもの成長を見守る役割に携わっている。

通ってきている子どもの年齢の区分としては就学前（幼稚園は三歳から、保育園は〇歳から）であることに変わりはないが、幼稚園は文部科学省が、保育園は厚生労働省が管轄している。私共は両者の立場でそれぞれの課題に取り組みながら今日に至っている。

幼稚園と保育園という根拠法令の異なる施設をその違いに基づいて運営する中で、違いを超えて分かってきたことがいくつかある。そのうちの一つが、乳幼児期の子どもは一人一人が大きく異なり、幼稚園教諭や保育士などの園の職員の働きかけで子どもが見せる姿もそれぞれであるが、こちらの働きかけに敏感に影響を受けるということである。園の職員が子どもの発達段階を適切に理解して働きかけをすることで、子どもはグンと伸びたり、自信をつけたりする。その姿が手に取るように分かる。

さて、乳幼児教育はかつて、叱咤激励をして何かを「やらせる」という風潮があり、職員は自分が描く完成形に子どもに合わせさせようとする光景があった。確かにできなかったことができるようになり、保護者からの賛同も加わり園の職員は手応えを感じたこともあるだろう。しかしこの方法は、〇歳児や一歳児には通用しなかった。褒めても励ましても〇歳児や一歳児に何かを成し遂げさせることはできない。万が一できたとしても子どもの姿は萎縮したようになり、無理をさせていることが明確になってくる。つまり、こちらが描く完成形に子どもを合わせさせる教育の方法では子どもが成長できないのである。

幼稚園は三歳から子どもを受け入れる。幼稚園の運営が私どもの子どもへの教育のスタートであることから、保育園でのこの歩みは幼稚園での教育を改めて考えるきっかけとなった。子どもに合わせさせるのではなく、子どもの特性に応じてこちらが合わせていくことが教育であり、それを園の職員ができるようにするために必要なことは何かを模索した。

子どもの状況に合わせて働きかけを選んでいくことは、それまで自分に子どもを合わせさせていた職員にとっては難易度の高いところである。それでも、乳幼児の教育について学んでいけば、その技術は十分習得できた。しかし、技術があれば子どもに合わせた働きかけができるかといえば必ずしもそうではなかった。その技術に加えて必要なのが、多様性を理解し寛容であることであった。子どもたちは多様であり、一人ひとり大きく異なる。それをひとまとめにしてしまえるのは、技術不足というより、むしろ多様性への理解や寛容さが不足していることが多い。多様であることを理解していれば、子どもを一人一人見つめることができ、寛容であれば子ども一人一人の姿に合わせた働きかけが自然にできるようになる。加えて、そこに個々にあった働きかけをする技術があれば、働きかけの引き出しが増え教育の方法に幅が出て質の向上につながる。

子どもにとって本当に必要なことは何か。子どもの発達年齢ごとの特徴はあるが、教育機関を運営する者として模索し続けていきたい。この模索が、就学後の教育に繋がっていくこと、繋げていく責任があることも視野に入れ、まさに必要なことを追求していく覚悟である。

学校法人森島学園
千葉聖心幼稚園

一般財団法人
森島奨学財団

紙面紹介

特別寄稿　6面
学校現場から　2面
学校現場へ　3面
会員のいきいきだより　4・5面
私の学園生活　7面
卒業を迎えて　8面
現役の学生から　8面
おたより　9面
我が学舎の今昔　9面
学舎の今　10面
支部だより　10面
新入生の声　11面
事務局より　11面
物故会員　11面
同窓生の美術館　12面
編集後記　12面

特別寄稿

回帰性の桜

似鳥　鶏
（H13・3卒　千葉市）

大学受験では一度浪人している。浪人という選択肢は現在ではすっかり少数派になったが、当時は普通だった（私の通っていた市立千葉高校はあまりに浪人率が高すぎるため「四年制高校」だと言われていた）。一度目の受験はすべて落ちた。最後に落ちたのがこの千葉大学で、センター試験（当時）が散々だったため、ほぼ受かる可能性はゼロだが、それでも万が一の可能性に賭けて受けなければいけない「後期試験」というものを経験し「負け戦のつらさ」をたっぷり味わった。南門から工学部を通って理学部方面に向かう通りを逆向きに歩きながら悔しさに唸り、何の樹か分からない並木を見上げて「俺は来年必ずここに戻ってくる」と誓った。

一年後、ちゃんと勉強したので今度はすべての大学に受かり（合格通知を送ってきた大学の入学を「蹴る」決定のなんと嬉しいことか！）、誓った通り「ここ」に戻って来ることができた。一年前、あの日にとぼとぼ歩きながら見上げた並木は満開に花開き、春の風で鮮やかな花吹雪が舞っていた。桜だったのである。

以来、何度となくここに戻っている。卒業しても、北海道に転居しても、子供ができても、夜になると戻る。学生時代の夢を見るからだ。

不思議なことに、学生でなくなってそろそろ二十年が経とうという中年男が、見る夢といえば学生時代のものばかりなのである。体感として、覚えている夢のうち二、三回に一回は学生時代のそれである。十代後半から二十代前半までの、たったの十年間足らず。なのにそこばかり見る。学生でなくなってからすでにそれに倍する時間を過ごしてきたのに、デビューやら結婚やら子供のあれこれやらで他にいくらでもイベントがあったはずなのに、夢の中では自分がすでに小説家をやっている中年だと認識しているのに、見る夢といえば学生時代に戻るものばかり。これは一体何なんだろうかと思う。

ダグラス・アダムスの法則というものがある。別に科学的根拠があるわけではないただのSF作家の箴言なのだが、人は十五～三十五歳の頃に発明されたものに対しては刺激的で興味深いと感じ、三十五歳以降に発明されたものに対しては、自然に反してよろしくないと感じがち、という話だ。アインシュタインの語録にもある。常識とは十八歳までに身につけた偏見のコレクションに過ぎない、と。何やら身に覚えがある。三十歳になった時、「とうとう三十かー。俺ももうおっさんだな（笑）」とか口では言いながら内心では（まあ特に老けてねーけど）と思ってはいなかっただろうか。四十歳になった時、ちょっと走ってみたら信じられないほど体が重く、そもそも「全力疾走の仕方」を忘れていることに絶望しなかっただろうか。「運動会の親子リレーでお父さんが転ぶのはなぜか」という話がある。まとまった運動をしない人は自分の肉体イメージが二十代の頃で止まっているため（「体育の授業」がなくなるのもこの頃だ）、脳がイメージする動きと実際に肉体がしている動きに差が出て脚がもつれるのだそうだ。要するに人間の成長、というより精神的な「時間経過」そのものが学生時代あたりでだいたいストップしてしまい、我々は二十代後半ぐらいからすでに「余生」の中にいる、ということらしい。だから起きて活動している時はどんなに成長して「年長者」のふるまいをするよう気を張っていても、一度眠ったら最後、学生時代のあの桜並木に戻されてしまうのではないか。

だとするとこれは呪いである。夢の中では年相応のふるまいだの常識だの立場だの責任だのを降ろし、生身の自分自身に戻れる。体が軽い。心は癒える。癒える呪いである。桜の夢から覚めるたびに常識を念入りに着込みつつそう思う。

「迷える子羊」から「羊」に
ー千葉大学での出会いに感〇ー

籠浦智彦（S59・3卒　富山県）

「西千葉に行って大学を見てから街並みを散策し、友に会いに行こうかな」と思っていたところに、Eb3の友からのメールと会報の執筆依頼があった。電話で話をしていると、大学にまつわることが脳裏に浮かび、懐かしさと共に感〇の気持ちがあふれてきた。

一　寄り添うことの大切さ
ー友との出会いー

大学時代は「おでん鍋」のように温かく一人一人が持ち味を発揮しているEb3に所属した。一人暮らしをしている私にとっては、安心・安堵できる居場所であった。

先日、家の断捨離をしていると、病気で入院したときに届いたEb3の多くの友からの手紙を発見。その場に座り込み読み始めると「困っている人にいち早く寄り添う友の温かさ」がよみがえってきた。感激、感涙、そして友に感謝。

二　心に抱き続けた言葉
ー教育実習指導教官との出会いー

「よい影響を与える教員になれ」これは担当のM教官が私にくださった言葉である。この言葉を四十年間心に抱き、実践してきた。

現在、M教官とは年賀状のやりとりしかしていないが、いつの日か顔を見て感謝の意を伝えたい。

三　リカレント教育で光が
ー教授との出会いー

「生徒指導の本質とは何」と悩み始めた教職十年目頃、リカレント教育として千葉大学U教授の下に入学した。教授と面談すると「木を見て森を見ずですね」と的を射た言葉をいただく。三か月という短い期間で少しでも多くのことを学ぼうと、講義は前列で受講し質問、文献を読みあさる。しかし腑に落ちず五里霧中。そんなとき教授と渡米し「チャータースクール」を訪問。生徒指導の本質を目のあたりにした。「光」が差し込む。感激、感無量、そして教授に感謝。

これらの出会いがあったからこそ「迷える子羊」から教育の本質を見失わない「羊（ギリシャ語で前に進むの意）」になれ、充実した教員人生を歩むことができたと執筆しながら改めて感じている。

千葉大学での出会いに感〇！

我が学舎の今昔（十）
陸上グラウンド

宮葉清子（S50・3卒　千葉市　同窓会報編集委員）

①は、昭和四十年十月二十四日のグラウンドの写真。教育学部が稲毛から西千葉に移転したばかりなので、どの運動部でも共用していた。サッカーゴールが左の方に寄せてあるのが分かる。

昭和四十年後半には、陸上競技場、野球場、サッカー場などに分かれて活動していた。当時の陸上競技場は土のグラウンドだったので、雨の降った後などは、どろどろになって大変だったという。スパイクの跡でガタガタになったグラウンドを木製でTの字型になっている大きな「トンボ」で地ならしをしたそうだ。コースも綱を張ってあるだけなので、大会の時などは、その上にライン引きで白線を引いたと聞く。

①

昨年（令和六年）、その陸上グラウンドが、新生千葉大学七十五周年記念事業で、素晴らしいグラウンドに生まれ変わった。②は、その工事中の様子である。令和六年三月から九月末までかかった大規模な改修だった。③は、令和六年十一月二日に行われた、陸上グラウンドオープンセレモニーの様子である（あいにくの雨のため、体育館で開催）。男子四百メートルハードル日本記録保持者の為末大さんが御臨席された。セレモニー終了後には、為末さん主催のパンくい競争があった。④は、新しく生まれ変わった現在のグラウンドである。全天候型のトラックになったので、いつでも競技会が開け、好記録が出るのも期待できる。

②

③

④

理科を総合的に学ぶ学舎

教授　大和政秀

「理科教室では教育学部小学校コース理科選修（定員二十六名）、中学校コース理科教育分野（定員十名）と、教育学研究科修士課程学校教育学専攻理数・技術系の学生が学んでいます。物理・化学・生物・地学・理科教育と領域分野が広範なため、特に中・高（理科）の教員免許取得を目指す学生は大変だと思いますが、理科を総合的に理解するスペシャリストを目指して、皆、頑張って勉強しています。二〇二五年二月三日には修論発表会、四日には卒論発表会が、それぞれ開催されました。専門外の先生からの思わぬ質問に四苦八苦する様子も見られましたが、研究を通して学問に触れた経験をこれからの学校教育に活かしてほしいと願っています。各教員もそれぞれの分野で活躍しています。物理分野の加藤先生は物性物理学、三野先生は光物性物理学、化学分野の林先生は物理化学・無機化学、生物分野の大和は菌類学・植物学、笹川先生は昆虫学、地学分野の泉先生は地球科学、理科教育の山下先生・大嶌先生は理科教育学を、それぞれ主な専門領域として研究に取り組んでいます。地学分野の泉先生は二〇二二年に「顕生代を通じた地球環境と生物の変遷、及びそれらの相互作用」というテーマで千葉大学先進学術賞を、理科教育の山下先生は日本理科教育学会の学会賞を、それぞれ受賞されました。

　教育学部全体の教員数が減少する中、理科教室も退職教員の補充が進んでいません。そのような中、本年一月に化学分野の渡邉先生をお迎えすることができました。有機合成化学を専門として、新分子の創出のみならず、計算科学を取り入れた反応開発に関する研究などを推進してこられた新進気鋭の研究者です。これからの千葉大学教育学部での御活躍に期待しています。教育実習の精錬授業などで協力校に赴いた際に、教育学部の理科専修・理科教育分野で学んだ卒業生と出会う機会があると、いつも嬉しく思います。実習生や新任教員の御指導につきましては、これからもお世話になることと思います。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

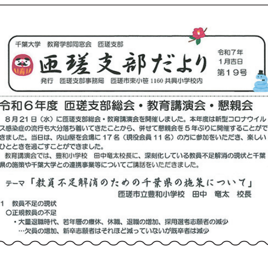
支部だより

匝瑳地方支部

　本支部の会員数は、退職会員五十二名・現職会員三十六名・計八十八名である。平成十八年の市町村合併を経て、旧八日市場市と旧匝瑳郡の在職者・居住者、そして現匝瑳市の在職者・居住者で組織されている。

　本支部では、毎年夏に支部総会を開き、併せて研修会を実施している。講師は本支部の現職会員の中から、各方面をリードしている優秀な会員に依頼し、喫緊の教育課題について貴重な情報提供をいただいている。昨年度は、匝瑳市立豊和小学校長の田中竜太氏に「教員不足解消のために」と題して、国や県の施策、千葉大学との協働モデル事業等について御講演をいただいた。

　また、平成十八年度より発行している「匝瑳支部だより」を総会資料とともに全会員に配付して、総会に参加できなかった方にも様子を伝えている。


千葉大学　教育学部同窓会　匝瑳支部

匝瑳支部だより

令和７年　１月吉日　第１９号

発行　匝瑳支部事務局　匝瑳市東小笹 1160 共興小学校内

令和６年度　匝瑳支部総会・教育講演会・懇親会

　８月21日（水）に匝瑳支部総会・教育講演会を開催しました。本年度は新型コロナウイルス感染症の流行も大分落ち着いてきたことから、併せて懇親会を５年ぶりに開催することができました。当日は、内山屋を会場に17名（現役会員11名）の方に参加をいただき、楽しいひとときを過ごすことができました。

　教育講演会では、豊和小学校　田中竜太校長に、深刻化している教員不足解消の現状と千葉県の施策や千葉大学との連携事業等についてご講話をいただきました。

テーマ「教員不足解消のための千葉県の施策について」

匝瑳市立豊和小学校　田中　竜太　校長

1　教員不足の現状

○正規教員の不足

・大量退職時代、若年層の療休、休職、退職の増加、採用選考志願者の減少

…欠員の増加、新卒志願者はそれほど減っていないが既卒者は減少

　昨年度は五年ぶりに懇談会を実施することができた。今後も年代を超えた会員相互の親睦を深めていきたい。

（文責　貝津　亮）

山武地方支部

　本会は、会員相互の連絡を密にして親睦を深めることを目的とした会である。そのために年に一度総会を開催している。概略は、次のものである。

〈喜寿・永年勤続者表彰〉

〈協議〉活動報告、事業予定、新役員の選出など

〈講演会〉令和六年度はアルパ（ハープ）の演奏を鑑賞した

〈懇親会〉喜寿・永年勤続のお祝いを兼ねる。

　会員数は現職・退職合わせて四百名を超えているが、会員の高齢化が進み、総会への参加者は減少傾向にある。これを解消すべく現職の参加者を増やそうと、総会とは別に「現職集いの会」を毎年実施している。この活動には手応えを感じている所である。

　また、教員の志願者が減っていることから、令和五年度は「教職員の生きがい」に関するエピソードを現職から募集し、同窓会本部を介して教育学部で紹介してもらうなどの対策を講じた。

　本会の活性化は、切実な願いである。

（文責　工川　洋）

同窓生の美術館

作る喜び

一陽会会員　平野正春（S57・3卒　千葉市）

写真左の作品は、「三月の風と四月のにわか雨が五月の花をもたらす」という西洋のことわざからイメージしたものである。今の若い世代の人たちには、いろいろな意味で生きにくい時代の中でも、困難に立ち向かい、明るい未来を切り開いていってほしいという願いを込めて作った。素材は二十年以上使い続けてきた石粉粘土で、静かに佇みながらも、力強く凛とした雰囲気が感じられるよう、時間をかけて丁寧に制作した。

大学卒業後すぐに中学校の美術の教師として働き始めたが、行く先々の学校はどこも課題を多く抱えていたこともあり、彫刻を作ることで心のバランスをとっていたように思う。そして、教職に就いてから二十年程が過ぎたころ、大学で彫刻を教わった恩師からの勧めで公募展にも出すようになり、本気で彫刻と向き合うようになった。定年退職後も、千葉市の施設や学校で働いているが、休日には朝から晩まで穏やかな心で彫刻の作品制作にいそしみ、ますます制作への意欲の高まりを感じている今日この頃である。

「３月の風と４月の雨」（左）
「当たり前の大切な一日が始まる」（右上）
「夢猫物語～旅の始まり～」（右下）

編★集★後★記

教員を定年退職して早六年。学校現場から離れたところで仕事をしていたが、五年目から千葉大学や附属学校園に関わる仕事に携わる。今年度からは編集委員にも声をかけていただき、千葉大学との縁に感謝。▼巻頭言の森島氏。就学前の子供たちを育てる熱意と責任感が伝わる。▼特別寄稿の似鳥氏。以前ＮＨＫドラマで楽しく拝聴した「育休刑事」の作者の方だと知り、同窓生の御活躍に感激。▼退職された方の寄稿では、地域に根付いて御活躍されている様子が伺われ、これからの生き方を考える上で大変参考になる。▼現職の先生方や新人の先生方の思いを知り、千葉大学で過ごした経験が生かされていることを感じる。▼同窓生の美術館の平野氏。素敵な彫刻の作品に癒やされ、定年退職後の理想の過ごし方だと感じた。▼初めての編集作業。編集長から送られてきた原稿を手に取ったときの身が引き締まる思いと原稿を読ませていただく楽しみが入り交じった気持ち。お役に立てればと思う。

（文責　柳谷　昌代）